

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

第33号

毎月発行

創刊2015年(平成27年)2月16日 月曜日

2015年(平成27年)2月16日 月曜日



宮城 牡蠣の家 東京サンケイビル 入り口

東京圏での「かき小屋」ブーム

牡蠣シーズン到来とともに最近、東京では、「かき小屋」があちこちに出来て一種のブームとなっている。

以前は、九州北部の日本海側の一部、宮城県、岩手県の太平洋沿岸部を中心にいくつかの「かき小屋」があったが、今シーズンに東京圏で一挙に増大したことは非常に喜ばしい。

『かき小屋』ブーム歓迎

東京圏で三陸カキ人気に火がつくか
三陸水産業復興の起爆剤となるか
消費の安定、供給の安定に寄与か
取材中、いくつかの出会いもあり



宮城 牡蠣の家 東京サンケイビル 焼き牡蠣



宮城 牡蠣の家 東京サンケイビル 店内

これで、一大消費地である東京圏の消費の後押しで、牡蠣全般の消費に拍車がかかり、その勢いをそのままに受けて、三陸牡蠣の人気に火がつき、さらに三陸被災地の牡蠣養殖業、ひいて

は三陸水産業の復興に拍車がかかることをぜひ望みたいものである。
また、こうしたかき小屋拡大は、牡蠣好きの筆者にとっても願ってもないことであり、まことにうれしい。ましてや出される牡蠣が三陸産の牡蠣なら言うことなしである。

「かき小屋」については以前、当新聞でも、三陸被災地の復興支援記事としても何度か取り上げ、何とか三陸被災地復興の旗頭になっていた。まことにうれし

いことである。
そんなことで、先月から今月にかけて、いくつかの「かき小屋」と三陸牡蠣取扱店を訪問取材し、実際に牡蠣を食べ、三陸の地酒もいただいた。今回は、この一連の取材日記である。

追い風材料

今回の突然ともいえる「かき小屋」ブームには、三陸牡蠣の魅力もさることながら、いくつかの追い風も吹いたようである。
ひとつは、居酒屋ビジネスが下火で、比較的小資本で開店できる「かき小屋」に進出しようという業者が増えたことがあるという。
写真でもお分かりいただけるように、冬季のみの季節ビジネスでもある「かき小屋」のつくりは非常に簡単なものであり、内装・外装に多額の投資は不要である。容易に進出可能だし、撤収もむずかしくない。加えて牡蠣ブームである。
二番目は、養殖牡蠣の水揚げの安定と、それに伴う消費市場への安定供給である。



かき消費拡大イベント in アークヒルズ 会場

東北地震発生翌年の三陸被災地の牡蠣養殖支援の声援も大きく、かなりの牡蠣増産が期待されたが、いざふたを開けると、供給予定を大きく下回る水揚げとなり、結果、業界関係者のなかには、供給契約を履行するためには大損失を被った業者もいたという話である。
そのため、その翌年からは、三陸牡蠣の取扱業者が減少し、一般市場への供給が減少し、そのため価格まで下落するという悪循環が起きてしまった。

この状況が、今シーズンの水揚げ量の安定により改善され、価格も上昇し、さらに高水準のまま価格が安定するという好循環に転換したようだ。
そのため牡蠣生産者も、なかなか市場でさばけないので、ネットでの直販を試



かき消費拡大イベント in アークヒルズ 牡蠣料理PRちらし



かき消費拡大イベント in アークヒルズ 募金贈呈

自然を相手の牡蠣養殖

一般的な流通している牡蠣は養殖ものが大半である。たまたま岩ガキとして非養殖のものもあるようだが、ほぼ養殖ものである。しかし養殖の牡蠣といっても、自然の影響を大きく受ける。種をつける時期に



飛梅・神田店 殻つき牡蠣



飛梅・神田店 店内風景

海水の温度が暑すぎず、かといって冷たすぎず、台風の影響で養殖の仕掛けから種牡蠣が海中に落ちてしまわないように、また、養殖に害のある藻の発生もなく、海が安定していて、などなど、さまざまな養殖条件を満たすことが必要である。

現在は、養殖牡蠣といえなくばすぐ広島産が浮かぶようだが、宮城産や岩手産の牡蠣がおいしいと話す、人によつては怪訝そうな表情をされることもある。三陸産牡蠣はまだ有名ブランドにはなっていないようである。ぜひ、このかき小屋チームで三陸産牡蠣のブランド戦略を打ち出して欲しい。野菜などでも、有名ブランドとそうでないものとの価格差は想像以上である。関係者の奮起をお願いしたい。遠慮は不要だ。

「かき消費拡大イベント in アークヒルズ」 今回の「かき小屋」及び牡蠣取扱店の訪問取材は、



飛梅・神田店 統括マネジャー

結局、四軒であった。そんな四軒の訪問取材であったが、感動ものの出会いもいくつかあった。当新聞を発行し続けて良かったと思える瞬間でもあった。最初は、1月末の六本木での牡蠣イベント「かき消費拡大イベント in アークヒルズ」であった。

「宮城 牡蠣の家 東京サンケイビル」 前述のイベント後、「宮城 牡蠣の家 東京サンケイビル」を訪ねた。この入口で思わぬ出会いがあった。 何かが入店の順番待ちをしていたが、そこにアークヒルズで立ち話をした宮城県庁の水産関係者がいて、名刺交換をしたが、ちょうどその上司も一緒だった。筆者が宮城出身で、石巻の高校OBであることを告げると、なんと後輩であった。それでいっしょに牡蠣を食べ、酒を飲みつつ、情報交換、意見交換をすることとなった。さらに、そこに宮城の牡蠣生産者が集まってきた、一時関係者の名刺交換会の様相を呈した。

「昭和記念公園 かき小屋」 最後は、立川市にある昭和記念公園



昭和記念公園 かき小屋全景

「飛梅・神田店」 飛梅は仙台市に本店のある宮城の海産物主体の居酒屋で、筆者も何度か訪問しているし、お店にも関係者にも取材したことがある。 そのお店が昨年、神田に出店したので、いつか訪問しようと思っていた。 金曜日に訪問したので、お店は混雑していた。なかなか店員に声をかけられずにいたが、最後に簡単な取材をしたが、そこで意外な返答があつて驚いた。

「かき小屋」 これまでの物理的な被災地支援のネットワーク



昭和記念公園 かき小屋入り口

「かき消費拡大イベント in アークヒルズ」 今回の「かき小屋」及び牡蠣取扱店の訪問取材は、



昭和記念公園 かき小屋店長

「昭和記念公園 かき小屋」 最後は、立川市にある昭和記念公園

第11回三陸酒海鮮会・渋谷開催 (1/17) 初のミニライブを開催 2名のミュージシャン出演 今後も継続予定

第十一回目の三陸酒海鮮会・渋谷開催は年明けの一月十七日に、焚火家さんで開催。今回は二十二名の参加で大盛況でした。
特に今回は、これまでのように三陸の海産物を食べ、三陸の地酒を飲むだけでなく、多少趣向を凝らしてみようということで、店長さんの粋なはからいにより初のミニライブを開催しました。また、芸達者なスタッフによる「話芸」もありました。
最初は、スタッフの突然の「話芸」披露に、「観客」は多少の戸惑いを見せながらも、盛大な拍手を送っていました。
また、ミニライブは、2名のミュージシャン出演ということになり、「観客」は興味津津。飲み食いもひと通り落ち着いたあたりでミニライブ開始となりました。



ミニライブ



ミニライブ

一人目は、岩手の被災地でもライブ活動をしているということで、オリジナル曲を二曲披露。二人目は、ギターの弾き語りで、「観

客」も聞き入っていました。今後もミニライブは開催する予定です。今回は三月十四日です。



おいしい鍋 牡蠣と白子



【簡単チーズのせ殻焼き】完成

水産業再興のための料理レシピ紹介

第6回目

【簡単チーズのせ殻焼き】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

新鮮な牡蠣が店頭にならぶ季節になりました。今回は、殻付きの牡蠣を利用して「簡単チーズのせ殻焼き」をつくります。



ホウレンソウ、ベーコン、ケチャップ



殻つき牡蠣

作り方

- ① 牡蠣を殻から取り出して軽く塩水で洗います。お湯を沸かし、ぐらぐら感で6~7分火を通します。(パック入りの牡蠣も使います) 生食用なら、そのままでもかまいません。
- ② ほうれん草を茹でてオリーブオイル(バター)で炒め、塩・コショウをします。
- ③ ベーコンを細く切ります。
- ④ 牡蠣の殻を洗い下の方を使います。炒めたほうれん草、ベーコン、牡蠣2~3個、ケチャップ、赤ワイン少々をふりかけてとろけるチーズを乗せます。
- ⑤ 殻ごとそのままフライパンに乗せて火にかけます。約10分程でグツグツとなってくるとチーズがとろけます。美味しそうになったら完成です。

熱々のところを頂きましょう。



フライパンに乗せて火にかける



とろけるチーズ乗せ

阪神・淡路大震災と 東日本大震災の間

阪神・淡路大震災から20年

1月17日は阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震の発生から20年となる節目の日であった。3月11日は言うまでもなく、東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震発生の日である。震災発生から20年の節目ということもあり、改めて阪神・淡路大震災について振り返る報道も多かった。そうした情報に接して改めて阪神・淡路大震災について考えさせられることもいろいろあった。1月の阪神・淡路大震災と3月の東日本大震災の間にある今月2月はそこを掘り下げてみたい。

阪神・淡路大震災と 東日本大震災

阪神・淡路大震災での死者は6434名、行方不明者3名、地震の規模はM7.3であった。これに対して東日本大震災では2015年1月9日現在、死者は15889人、行方不明者は2594人である。地震の規模はM9.0でこれは世界の観測史上でも4番目の大きさである。地震の規模を示すM(マグニチュード)が0.1大きくなるとエネルギーは約1.4倍となるので、東北地方太平洋沖地震のエネルギーは兵庫県南部地震の25倍に相当するわけである。では、阪神・淡路大震災の地震の規模をはるかに上回る地震を体験した東北地方の太平洋岸の我々が、阪神・淡路大震災から学ぶことは何もないのかと言えば、決してそのようなことはない。世界で4番目の地震に直面したからと言って地震に関する全てを体験したわけではない。地震のことを全て分かったつもりになっていては、次に地震に遭遇した時にまた「想定外」という言葉を持ち出さなければいけなくなるに違いない。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagmas/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

ばいけなくなるに違いない。兵庫県南部地震と東北地方太平洋沖地震、この2つの地震はその性格も、もたらした被害も、今さら言うまでもないが、全く異なる。もちろん、震災後のまちづくり、コミュニティづくりの面でいろいろと学ぶことはあるが、それは今までも事ある毎に指摘されてきており、ここでは取り上げない。一方で、防災対策という面から学ぶことはまだまだたくさんある。

東日本大震災における死者・行方不明者の大半は周知の通り、大津波によるものであった。これに対して阪神・淡路大震災における死者のほとんどは建物の倒壊、それに大規模火災によるものであった。東日本大震災を経験した私たちは、阪神・淡路大震災で発生したこれらのことをほとんど経験していない。それは兵庫県南部地震が直下型の地震で、それに対して東北地方太平洋沖地震は海底を震源とする海溝型地震という違いによるところが大きい。もちろん、地震の規模の割に建物の被害が少なかったのは、特に宮城県は25〜40年に一度の周期で、宮城県沖地震に襲われてきたという経緯があったことも関係している。1978年の宮城県沖地震でもブロック塀の倒壊などによって28名の死者を出したこともあって、建物の耐震化も他の地域に比べれば進んでいたと

地震による建物倒壊と火災発生にどう対応するか

先述のように阪神・淡路大震災における死者の8割以上は、老朽化した住宅の倒壊による圧迫や窒息が原因であったとされる。これはほとんど東日本大震災では体験されていない。この阪神・淡路大震災で倒壊した住宅のほとんどは、1978年の宮城県沖地震を契機に1981年に改正された建築基準法の成立以前に建築されたものであったとされている。一方で、この改正された建築基準法の新耐震基準に合致した建築物には、震度7の揺れがあった地域であってもほとんど被害は見られなかったという。したがって、直下型地震による住宅の倒壊を防ぐ最良の手段は耐震補強である。特に、1981年以前に建てられた建物については、仮に震度7の地震が来ても人命を守るように必要な補強や改修をすることが必要である。

震災で発生した大規模な火災は「津波火災」、すなわち津波をきっかけに発生した火災が主であった。津波で破壊された石油タンク、建物やLPガスボンベ、自動車などが主な原因と考えられるとされている。日本火災学会の地震火災専門委員会の調査によると、東日本大震災で発生した火災325件のうち162件が津波によるものであった。

一方、阪神・淡路大震災当時、特に神戸市長田区では木造住宅が密集していた地域を中心に大規模な火災が発生した。消防庁の資料によると、地震後に少なくとも合計285件の火災が発生した。そのうちの7割は地震発生当日の火災であるが、地震直後の午前6時までに発生した火災は87件にとどまり、地震発生から一定時間が経過した後の火災発生が相当数あったことが分かる。地震翌日以降の火災も多かった。これらの火災によって実に7000棟を超える住宅が焼失し、焼損面積は80万平方メートルに上った。

来るべき直下型地震に備えて

東北地方太平洋沖地震は「1000年に一度の地震」と言われた。実際、これだけの規模の地震がこの地域を襲ったのは、869年のいわゆる貞観地震以来のことである。しかしだからと言って、この地域がその間全く地震に襲われなかったということではない。今回の地震が起こる前に「津波は来ない」という誤った常識がまかり通っていた仙台平野を含め、東北地方の太平洋沿岸地域は度々津波を伴った地震に襲われている。残念なのは、そのことが地域に十分伝承されていたとは言えないということである。

この断層ではおよそ3000年に一度の割合で地震が発生していると考えられているが、前の地震は約16000年前以後だったとはされているものの具体的にはいつだったか正確には分かっていない。この断層によって起こる地震の規模はM7.0〜7.5と、まさに阪神・淡路大震災を引き起こした兵庫県南部地震とほぼ同規模であると想定されている。この地震によって、旧仙台市のほぼ全域で震度6強の揺れが起こると予測されている。そうすると仙台市内でも特に建物が集中している地域が最も強い揺れに襲われることになる。予測される地震の規模と引き、市街地直下の震源と言いつつ、ひとたびこの地震が起きればまさに、仙台市内は阪神・淡路大震災と同様の被害に見舞われる恐れがある。このことがあまりよく認識されていないのではないだろうか。

地震予知連絡会は、東北地方太平洋沖地震時に、25〜40年周期でやってくる宮城県沖地震も同時に発生している。すると次の宮城県沖地震は少なくとも四半世紀後かと思いたくなるが、実際には宮城県沖地震とされた地震の中には前の地震から数年しか経っていないものもいくつかある。「天災は忘れた頃にやってくる」とは、まさにありふれた言葉が真実を突いていることの良い例である。阪神・淡路大震災と東日本大震災の間にある今の時期、もう一度天災に対する日頃からの備えについて振り返っておきたい。

連載
むかしばなし



第二十一話
藤原の王国を見よ

陽が暮れて三、四刻過ぎたろうか。大戦、とはいえず勝つ気のない囷の籠城作戦を明朝に控えた名取高館の兵たちが就寝に動き始めた。何割かは起きたまま見張りに立ち、大半は不安なる眠りにつくのであろう。

若もまた、高衡を引き止めて話を聞き出し続けるのは気が咎められたが、平泉藤原氏の内情はまだまだ謎に満ちていた。

「伊達の地から養子となられた泰衡様は・何故お世継ぎとされたのでしょうか。」

共に鍋を囲んだ兵らも立



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

ち上がっていたが、高衡は構わず少女と向き合い続けた。

「兄・泰衡は伊達の佐藤家の長子です。羽黒衆とともに京への視察、情報・学識の掌握を任された家柄で、泰衡も某も、京へ向かった事がありました。泰衡は当家きつての秀才であるだけでなく、初代清衡公の御意向をよく理解し平泉、奥羽両国の進むべき道についてよく秀衡と対等に議論していた。それで父は、実子忠衡の指針・手本とする意味でも、泰衡を養子として迎えられたものと思われま

す。」

「では、一番上の兄上様は・。」

「長兄・国衡が藤原家に入ったのは、実はずっと後の事でした。忠衡が犬天狗の血筋である事から、もともと出羽の男鹿より奉公に来ていた西木戸太郎がその力の抑止力のために迎えられたのです。」

「抑止力、といえますと」

「国衡は、男鹿にある八郎の大湖周辺を治める一族出身で、大河次郎兼任の実兄です。八郎の途轍もなく、巨大な湖は、これまた古より魔物の住処と恐れられ、大

河の率いる兵は湖の魚どもが変身したもので無尽蔵である、という噂さえあります。」

どこまでも、信じ難い話であるが、若は絶対にこの内容を忘れるまい、と決心していた。同時に、迫り来る王国の瓦解の音を身体に感じるようで、胸が苦しかった。

「ありがとう、四郎様・遅くまでこんなにくたさん話して下さい。だけど、本当に、お命を無駄になさらないで下さい・私でもできる事があれば仰って下さいまし。」

高衡は微笑を返す。

「若どの。千年後の奥羽は、よい所のままでしょうか。」

「私の時代は、ここからせいぜい七百年後の世界だけど・どうかなあ。私は、岩手が、あつまつまり、この国が、好きだけだね。生きるのには、大変だと思っけども、みなな」

「そうですね・若どのが好きなら、よい所のままです。少し、安心しました。」

「何をやっているのだ・・龍め。」

単身馬で広瀬川沿いを南進し、陸に打ち上げられた鯨のように横たわる向山を対岸にして河原に立っている。天上へまっすぐ昇っていく小さな光を一目散に追っているように見えた長い身体が、やがて諦めたように上昇をやめて地上へ取って返し始めた。

ああ、あの光はトヨ殿だ。忠衡は目を細めず何故かわかった。何かに跨り、空を飛んでいる・鳥の翼に馬の脚、全身の巻き毛。そうか、即ち午・羊・猿・西という、南から西にかけての干支獣の集合体だ。おそらく国見の森に住むという化け山猫を連れ出したか。

あの芭蕉とかいう坊主、胡散臭いが相当の魔術の使い手と目されるな・・。

龍が川の流れを離れたので、その隙にあの連中は水の消えた川を渡って大天狗の領域へ渡った、ということだろうか。

忠衡の目の前の広瀬川の流れが、上流が途切れたためであるう、急激に濁水していき。この下流までは、忠衡自身が遙か北東の塩竈社から南西の烏兎森にかけて張った防塁結界の力が及んでいない。結果は青葉山の南の峽谷を縫うように貫いていて、龍が実体化できるのもそこから北のみなのである。そこが深い霧の立ち込めた、大天狗の住む世界という事だ。

川の力が退いた隙に、忠衡は対岸へ馬脚を進める。

川の中には流れに沿って太い杭が並べて打ち込まれ、頑丈な縄がどこまでも張り巡らされているのが確認できた。

龍が川の流れに戻ったためだろう、水がどどどと音をたてて上流から降りてきて、たちまち結界の仕掛けを覆い隠していった。

巨大、長大なる龍は国分原防備の要である。しかしその本体である広瀬の川は名取大河の支流であり、大河に入って海に至るまでその身を伸ばさねば、敵軍の侵入をみすみす許してしまう事になる。そして支流終点の反対側、烏兎森へ向かう上流方面もまた防壁のうのだが、龍の頭とて二又はなく、力が分散する恐れもありそちら側には大縄は張られていない。

「この事は、烏兎森方面は、乗り込まれる・・敵の霊的戦力に、大河次郎が脅かされねばいいのだが。」

大河次郎兼任、伝説の男か・・。義兄・国衡の親族であり、武勇無双、人望厚き逸材であったと聞く。天から落ちた鬼神・名取太郎に負けて肉体を奪われてからは、烏兎森の頂に魂が幽閉された状態にある。名取太郎も知っていたはずだが、烏兎森に魂が入るという事は、逆に地主神、鎮守としての力を得るといふ事でもあるのだ・・。

向山の低い稜線に沿って、燈明が灯されている。

「泉様であられるか。」

龍にも多くの兵がいて、忠衡に声をかけてくる。国衡の命によって、泰衡が名取川から南下する事を阻止した勢力である。

そう、本来は泰衡自身が伊達阿津賀志山で采配を振るう算段でいた・・なにしろ、彼の生来の、地の利を心得た本拠地だったのだから。

「ものの見事に伊達は陥落したようじゃのう。」

忠衡は、国衡の兵に皮肉を投げつけた。せんなき事・国衡にすれば、武は己の、政は泰衡の領分だとわかっていったのだ。

「向山に登る。案内せよ。」

頼朝は眠れなかった。船の陣地の夜長に響き渡る、秋の虫たちの合唱のせいではない。

「弟よ・まず安心して眠るがいい。確かにここから先が真の修羅の道。だがこの俺がついておる。」

に独り静かに舞いを踊る酔狂な男がいる。

式部太夫親能である。相模の出にて京の官人として出世しながら、頼朝の拳兵に呼応しこまで従ってきた。弟・義経の行軍を支えた武人でもある。頼朝に気づくと、悪びれもせず歯を見せて笑った。

「明日も晴れますかな。」

「飲んでおるのか・貴様。」

「勿論、末期の水と心得ております。」

「ふざけた事を・おのれ、わしにも相伴させぬか。」

「能直は、よくやりました。」

親能が言った。実は、頼朝は自らの隠し子を、親能に預けておるのだ。それが阿津賀志山越えて、初陣を飾っていた。他にも多くの養子を抱える、子育ての名手なのである。

「親能よ・其方の猶子に秀郷流の者がおるとな。いわば、平泉藤原と同族・。」

「いかに。秀郷流が秀郷流を誅す・これも歴史の妙でございませう。京の血脈が、今や蝦夷の長である。おそらく、これから殿の御家臣方が、奥羽に領地を持たれる事になれば、やがてそれが新たな時代の蝦夷と呼ばれるのでござらうな。」

「深読みしすぎでしょう。むしろ、僕らの方から畏れに怖たようなものなんですから。」

純三の不安もむべなる哉、といった状況である。昭和の時代には堅牢な仙台城の威容が残る青葉山が、今た

だの暗い大きな森となつて一行の前に立ちほだかつているのだ。

その時、盲目のヤエトがはつきりと口にした。

「ヤエトは、もうすぐお別れだ。」

蜂の一族であるヤエト。三十人以上いる仲間の人格が、毎日一人ずつ入れ替わるといふのだ。

「青葉山は、もともとは我が一族の支配した森。大天狗はこの山の全てを、流用しているに過ぎない。」

「では、地の利を心得ておいでか。」

芭蕉が尋ねる。

「説明している時間など、ない。二人か一人に分かれて別方向から攻める・・それだけだ。それぞれ異なる災難が待ち受けていよう。」

ヤエトの最後の言葉には、何の励ましもなかったが「よくないな・明日目覚めるのが、もしチャンネルであれば・お前たちも大天狗も、ただでは済むまい。」

どこか、彼らを仲間として心配する気配もあった。美しく紅葉する楓の樹の元に座り、寄りかかると、文字通り眠るように、ヤエトは去っていった。

「次回予告」

少女、予告が先走つていましたよで申し訳ございません・賢治、喜善たちの夜更かしは続く。チャンネルうらって、どんだけ怖い女なのか?

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.



巨大つらら

氷点下十度以下の厳冬

遠野は真冬を迎え、氷点下十度以下にもなる厳しい寒さの季節となった。

現地の寒暖計の写真を撮るたび、東京にいる寒がりの筆者の身体が反射的に強張ってくる。氷点下十度以下というのは、寒いという感覚を通り越し、刺すような痛みになっているだろう。大分前のことだが、年末のソウルで氷点下二十度近くの寒さを経験したことがあるが、あの時も、寒いというより、複数の針が肌に突き刺さってチクチクする感じがしたものだ。

氷、氷、氷

そんな遠野の厳冬の風景といえば、雪景色というよ



氷のワニ

りも、氷の景色である。まずは、巨大なつららをご覧ください。写真だけ見てもその長さから

シリーズ 遠野の自然
「遠野の初秋」
遠野 1000 景より

ないが、人間が写っている他の写真では、三メートル以上の長さのつららである。東京近辺では見ることはない大きさだ。小さな滝も凍りついている。洞窟の中の水の流れも凍りついて、凍った川のようなのである。めったに見られない光景である。沼地では、もっと珍しい



流れる氷

光景が出現している。筆者は「ワニ」と名づけているが、細かなつららが楕円を形成するように連なり、ワニの口のように見える。氷のはかまをはいた枯れ木もよそではお目にかかれぬ。水中から突き出た鹿の角に見える。氷筍(ひょうじゅん)は



凍てつく

文字通り氷のたけのこ。これもめずらしい。
正月行事と祭り
こうした氷だらけと思われる真冬の遠野ではあるが、もちろんさまざま人の活動もある。寒いからといって、一日中家に閉じこもってはられない。



どんと祭

小正月の十五日、神社では「どんと祭」が行われ、各家々の正月飾りやお札を持ち寄り、焼かれる。その火で餅も焼かれる。きつとおいしいことだろう。雪景色のなかではし踊りの鹿の撮影会も開催された。積雪を背景にした鹿装束の黒が映えている。



氷のはかまをはいた枯れ木



雪のなかの撮影会



氷筍

シリーズ企画 東北大震災と宗教を考える 神道の源流を探る旅① 奈良一大神神社

東北大震災と神社参拝

ちょうど2年前、伊勢神宮に参拝した。東北大震災と宗教、なかでも神道との関係を考えてみたかったこと、及び同年秋の式年遷宮前に行ってみたということがあったためである。

しかし、一度訪れたくらいで東北大震災と宗教の関係について何かが分かる訳もなく、その後、答えを求めて東北各地の神社仏閣を巡り、他方、日本の宗教について考え続けてきた。

とはいえ、行けば行くほど、迷路にはまり込み、答えは永遠に見つかりそうもないと思いはじめた。

神社の源流—大神神社

そんな矢先、まさにおあつらえむきに大神神社行き旅行パンフレットが突然目の前に現れた。

大神神社と書いて、「おおみわじんじや」と読むが、そこは古事記や日本書紀に



本殿のない大神神社の拝殿

も登場する日本最古と言われる神社であり、日本神道の源流への入口が見出せるのではないかと、いつか参拝したいと思っていた。

この神社には拝殿はあるが本殿はない。ご神体が美輪山である。また、磐座神社は岩がご神体であり、美輪山頂にあるという磐座の巨石のミニチュア版ともいえるものだが、古い神社の形であるという。

また今般は山頂に登れず残念だったが、ご神体としての美輪山とは、巨石としての磐座でもあるという。

いわば、超古代の巨石信仰が残っているともいえる。

古代、日本の神社が現在のそのような神社になる前は、こうした形式が一般的であり、後に様式化して本殿が出来、現在のような神社形式が出来ていったのではないかと、それを実感させる神



大神神社ご神体の美輪山

本殿という形式

神社は、古くはヤシロ(社)といい、このヤシロとは本来は「屋代」の意味で、神を祭る仮小屋や祭壇を指す。神の仮住まいに過ぎなかったヤシロは、寺院において仏像を祀る仏教の影響から、御神体を常祭する「神社」へと変貌していった。神社において、最も重要な御神体の鎮座する内陣を備えた建物が「本殿」とされ、御神体を拝むための「拜殿」や、神域を区切る鳥居などの設備が整備されていったと言われている。そういった神社の歴史を垣間見せる大神神社であった。

自然の中で生きる

一昨年、十和田神社を参拝した折に驚いたことがある。神社全体が溶岩だらけ



自然そのままの十和田神社本殿

であった。拝殿も本殿も木造であったが、土台は巨大な溶岩であった。自然のままを取り込んだ荒々しい神社に圧倒された。そしてこれが神社本来の姿ではないかと思

時代が下って様式化された神社は、十和田神社参拝以来、神との距離が感じられてならない。やはり自然そのものを実感できる神社がしっくりすると感じた。

大震災と自然の驚異

東北大震災はあらためて自然の驚異というものを思



古い形を残す磐座神社

い知らしめた。圧倒的な力を見せつけられ、人間の無力を徹底的に思い知らされた。人間の築き上げたものなど幻影にすぎないとまで思わせた。

そうした空虚さを保持したままの心は、最も原始的な宗教を求める。世界でも類を見ないほど自然環境の厳しい日本という国が育

だ宗教のうち、もつとも自然の驚異を体現したようなむき出しの宗教を求めている自分を感じるのである。

そうした宗教以外に、あの震災を乗り越えていくことが出来る宗教はないと直感的に思うのである。

東北を思い出させる旅

そんなことを思いながらの神社仏閣巡りの旅であった。そして急に東北の神社仏閣が懐かしく感じられた。決して豪華さはないし、規模も大きくはないが、古代縄文人から現代まで、自然と対峙し、歴史の荒波を生き抜いてきた東北の神社仏閣がとても身近に感じられた。

そうしたところに、清水寺で、古代東北の雄、アテルイとモレの顕彰碑に出会った。不意を突かれた幸福な出会いだった。



大物主大神の化身の白蛇が棲む
巳の神杉(みのかみすぎ)



大和三山 香具山・畝傍山・耳成山



「清水寺—アテルイとモレ顕彰碑



石上神宮の主祭神は神剣
「師霊(ふつのみたま)」



清水寺—アテルイとモレ顕彰碑説明

第32号 ネットアンケート集計結果

【阪神淡路大震災と東北大震災】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	12
	(2) 被災地以外の東北	1
	(3) 東北以外	7
②	性別	
	(1) 男性 (2) 女性	17 3
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	1
	(3) 40歳以上60歳未満 (4) 60歳以上	17 2
④	阪神淡路大震災を覚えているか?	
	(1) はっきりと覚えている	12
	(2) 一部忘れかけている	7
	(3) ほとんど忘れてしまった (4) いずれでもない	0 1
⑤	阪神淡路大震災からの復興	
	(1) ほぼ復興した	10
	(2) 復興途上である	7
	(3) 復興したとは言えない (4) いずれでもない	2 1
⑥	阪神淡路大震災と東北大震災比較①	
	(1) 阪神淡路大震災の方が早い	17
	(2) 確保東北大震災の方が早い	0
	(3) 同じくらい (4) いずれでもない	0 3
⑦	阪神淡路大震災と東北大震災比較②(政府)	
	(1) 阪神淡路大震災の方が関心高い	6
	(2) 東北大震災の方が関心高い	7
	(3) 同じくらい (4) いずれでもない	3 4
⑧	阪神淡路大震災と東北大震災比較③(国民)	
	(1) 阪神淡路大震災の方が関心高い	2
	(2) 東北大震災の方が関心高い	9
	(3) 同じくらい (4) いずれでもない	5 4
⑨	両大震災復興の連携は可能か?	
	(1) 可能である	11
	(2) むずかしい	4
	(3) 無理である (4) いずれでもない	3 2
⑩	両大震災復興連携の担い手	
	(1) シニア世代	2
	(2) 現役大人世代	9
	(3) 若い世代 (4) いずれでもない	7 2



今回は【阪神淡路大震災と東北大震災】でした。今から二十年前の一月十七日、東北大震災の印象がまだ強烈に残っている中で、多少かすんでしまったかもしれませんが、あのときも、神戸の街にあちこちで火の手が上がり、とても信じられない光景が広がっていました。その阪神淡路大震災と東北大震災を比較してみました。回答者数は二十名。

「阪神淡路大震災を覚えているか？」は「はっきりと覚えている」が60%、「一部忘れかけている」は35%。「阪神淡路大震災からの復興」は、「ほぼ復興した」が50%、「復興途上である」が35%。「阪神淡路大震災と東北大震災比較①」で、復興は「阪神淡路大震災の方が早い」が圧倒的で85%。「阪神淡路大震災と東北大震災比較②」で、政府の関心度は「東北大震災の方が関心高い」が35%、「阪神淡路大震災の方が関心高い」が30%で拮抗。「阪神淡路大震災と東北大震災比較③」では、国民の関心度は「東北大震災の方が関心高い」が45%、「阪神淡路大震災の方が関心高い」が10%と差がつかまりました。「両大震災復興の連携は可能か？」は「可能である」が55%で、「むずかしい」の20%を引き離しました。「両大震災復興連携の担い手」は「現役大人世代」が45%、「若い世代」が35%で続きました。

編集後記

先月末から今月初めにかけて、三陸産の牡蠣をたくさん食べました。今年の牡蠣は出来が良いです。どれもふっくらとして、大粒でおいしい。

牡蠣といえば、すでに縄文時代から食べられていたようです。最初に食べた人は勇気がある人です。あんなに堅い殻のなかに、柔らかい牡蠣があり、しかも毒はなく、おいしいということから、すごいパイオニア精神です。

牡蠣以外にも、縄文人の食のレパートリーはかなりの広範囲に亘っており、最近の加工食品類を除けば、ほぼ現代人の食のレパートリーと大した差はなかったようです。

縄文時代の貝塚から発見される食物の痕跡を見ると、貝類や、マグロやサメなどの魚類、アザラシやトドなどの海獣類、熊、鹿はもちろんだ、タヌキまで食べていたようです。

そうした意味で、現代人の食生活は縄文人のパイオニア精神によってもたらされたと言っても過言ではありません。

そして縄文時代は一万年以上続いたわけですから、ある意味で、日本人の食生活は基本的に一万年以上の歴史を持つとも言えます。牡蠣を食べながら、そんなことを考えてみました。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
(郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブloid新聞【東北復興】宛
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています